



お・しえの花束

説法の名人



お盆号

「雲 晴」 第二十三号
平成二十九年七月一日発行

貞林院瑞正寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五-四六-五
電話(03)3627-3411
FAX(03)5699-5915

大喜びのキサ・ゴータミーは家々を訪ねました。どこの家も芥子の実などおやすいご用だといつてくれるのですが、「今までに一人の死人も出したことはないのでしょうね?」と問うと、どの家の人も悲しい顔になり、亡くした家族のことを語り始めたのでした。次から次へと村中の家々を回つたけれど、一軒として死人を一人も出したことのない家などありません。

疲れ果ててお釈迦さまのもとへ帰ってきたキサ・ゴータミーは申しました。

お釈迦様は相手に応じて教えをお説きになる名人でした。たとえば……。

キサ・ゴータミーという女性が、自分の一人息子を死なせてしまい、悲しみのあまり気も狂わんばかりに死体を抱き、何としても生き返らせてほしいと修行者や仙人を訪ね歩きましたがかなえられず、お釈迦さまのところへまいります。お釈迦さまは申されます。

「よろしい。死んだ息子の命を取り戻してあげよう。ただしキサ・ゴータミーよ、これから一度も死人を出したことのない家に行つて、ひと粒の芥子の種を持つてくるのだ。いいかね、一度も死人を出したことのない家の芥子の実をひと粒持つてくれば息子の命はよみがえる!」

「お釈迦さま、一人も死人を出したことのない家などありません。どこでも両親や兄弟や子どもを亡くして、深い悲しみを経験し、その苦しみに耐え、やがて生きる力を取り戻しています。お釈迦さま、私にはよくわかりました。この世に生まれたものはいつかは死にます。私の息子を生き返らせることはできません。私もこの悲しみに耐え、生きつづけてまいります」

キサ・ゴータミーの語ったことを、はじめにお釈迦さまがさとされていれば、彼女は気がつくことなくまだ乱れ狂っていたことでしょう。

お釈迦さまはほんとうに人を見て法を説く名人でした。

●唯一、形に残るもの● 念佛院住職 中野良平

皆様、ご法事等で聞いたことがありますか？もしかして、今日はお塔婆についてお話をしたいと思います。

仏教をお開きになりましたお釈迦様は、たくさんのお弟子さん、お檀家さんに共通して言わされたことがあります。それは、「私達人間は心と形を整えるように生きていくことが大切ですよ」とおっしゃいました。

心は仏様やご先祖様や先に旅立たれた大切な方への敬い偲ぶ気持ちであります。形とは法要を営むことや

うなものです。

法話

それ以外にも実は残された私達に

お焼香をすることやお念佛をお称えすることなどがあります。

そして唯一、目に見えて形に残るものが「お塔婆」です。お塔婆もお釈迦様の時代から始まっています。

当時は現在のように木を加工する技術がありませんでしたので石塔でした。

現在はいつでもご供養ができるようにと木の板で建立するようになりました。お塔婆は宛先（お名号）どなたに（法名）誰が（施主）といふように大切な方々へのお手紙のよ

うつかり法要を忘れてしまうこともあります。しかし、遅れてしまつてもご供養をして下さい。そして自信をもって前向きに生活をしていただければ幸いです。

「同唱十念」

『坂三里、つらさが楽し、里帰り、若葉のあなた、桃の咲く家』

この和歌は昭和五十年九十一歳で亡くなった浄土宗僧侶の歌でお念佛の布教でよく引用されています。

同じ言葉でも受け止める人の器によつて、異なるおもむきとなります。

男女の別、若い時と老いた時、人生経験などにより器はそれぞれ異なり、一人の人でも時の経過により器は変化していきます。したがつて、この歌は結婚した女性には、正に活字通り、幼き時代の懐かしき我が家、我が家を想い浮かばせ、又、進学、就職等で故郷を後にした人達にとっては、とても同様に望郷の念を呼び起させれるでしょう。

お爺さんは成長した二人の子供を連れて、自慢の鉄砲で鳥や獣を射止め山野を歩いていました。

兄を次郎、弟を五郎と呼んでいました。

お爺さんは成長した二人の子供を連れて、自慢の鉄砲で鳥や獣を射止め山野を歩いていました。

民話の小箱（岩手県）



次郎・五郎の滝つぼ

●いのち

むかし、川角に年老いた猟師の夫婦が住んでいました。

若いときには子供に恵まれませんでしたが、年を取つてから男の子が二人生まれました。

兄を次郎、弟を五郎と呼んでいました。

ある年、お爺さんは世にも珍しい大鹿を射止めました。

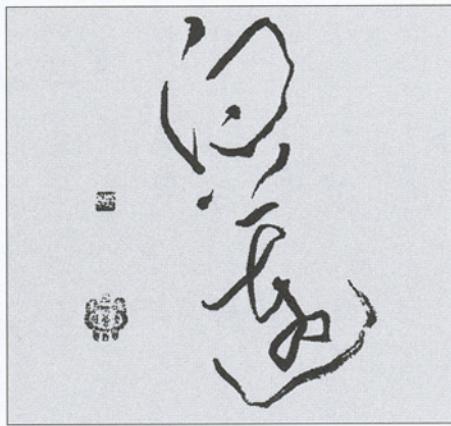
「なんと普通の鹿の倍以上もある大鹿だつたげな」「皮をはいで広げたら六畳の部屋一杯あつたそうな」と近郷の大評判になりました。おじいさんがなくなつて三年の月日が経つたある秋のことでした。

その年の暮れから翌年にかけて、お爺さんは身体の調子が悪くなり、限つてウサギ一匹見当たりません。

お爺さんは成長した二人の子供を連れて、自慢の鉄砲で鳥や獣を射止め山野を歩いていました。

「今日は天気も良いし、収穫があるぞ」と二人は勇んで出かけました。しかし、どうしたことか、その日

字面以上の思いが詠まれていると感じさせられるのです。



「白蓮」 故林 錦洞書
貞林院瑞正寺 住職 林 清方

草書で「白蓮」と読み、柔らか
な細い線でも躍动感があり、線に
力強さを感じる作品です。

私の寺は葛飾区にあり、すぐ裏
手には都立水元公園があります。

春は桜、初夏は菖蒲、そしてこの

時期は池に蓮の花が一面に咲きま
す。四季折々の花を散歩しながら
楽しめるこのような環境に感謝し
ています。

蓮は仏さまと深く結びついてい
る花もあり、お釈迦さまは蓮の

花を題材としてこのような教えを
お伝えしています。

草書で「白蓮」と読み、柔らか
な細い線でも躍动感があり、線に
力強さを感じる作品です。

「法句經」という経典の中に
「都大路に捨てられし 塵芥の堆

の中より げに香りたかく ここ
ろ樂しき 白蓮は生ぜん」という
句があります。

「都に住む人たちが捨てた沢山
のゴミの中から、何とも良い香り
をさせて、真っ白な蓮の花が咲い
ている。なんとすばらしいことだ
ろう。」という意味です。

お釈迦さまは、濁った泥の中で

かであっても、自分自身の中に煩
惱といふこころの汚れを持つてい
ることに気づき、不浄な欲望や誘
惑に負けず、蓮のように真っ白な
花を咲かせるように生きなさいと
も教えています。

「おかしいのお、窓が山から魚切れの方へ行つてみよう」と二人は足を速めました。窓が山の山すそまでたどり着くと、二頭の小鹿を見つけました。しかも、珍しい白鹿です。

「おい、可愛い小鹿じや、生け捕りにしようや」と二人は両側から追い討ちをかけるように、あとをつけましたが、一頭は見失つてしましました。もう一頭のあとを追つて二人は山深く入つて行きました。

山へ追われた小鹿は、今度は谷間のほうへ一目散に逃げました。川沿いで追い詰められた小鹿は、ある大岩の上にかけ上つたと見ると急に姿を消してしまいました。

「大岩の上に追い詰めたぞ。反対側にうすくまつているはずだ、それ」と岩にかけ上りましたが、二人とも勢い余つて滝つぼに落ち中へ吸い込まれてしまいました。そのまま、鹿も兄弟も上がってはきませんでした。

それから何年か経ちました。その頃この滝つぼに大きな鯉が二匹泳いでいるのを見かけるようになりました。村の人たちは「この鯉は兄弟の化身」と信じ、この滝つぼを「次五郎の滝」と呼ぶようになりました。

おしまい

(総本山知恩院布教師会ホームページより)

る蓮のよう、私たち人間もどの
ような環境でも、周りの人たちが
どんなに悪い人たちばかりでも、
自分は常に清らかに堂々と生きて
いくことが大事だと教えています。

また周りの環境がどんなに清ら
かであっても、自分自身の中に煩
惱といふこころの汚れを持つてい
ることに気づき、不浄な欲望や誘
惑に負けず、蓮のように真っ白な
花を咲かせるように生きなさいと
も教えています。

その岩の反対側は急な絶壁になつており、その下は深い滝つぼになつていました。

「大岩の上に追い詰めたぞ。反対側にうすくまつているはずだ、それ」と岩にかけ上りましたが、二人とも勢い余つて滝つぼに落ち中へ吸い込まれてしまいました。そのまま、鹿も兄弟も兄弟も上がってはきませんでした。

明治、大正、昭和に渡る長き時代にお念仏を進めて生きてこられた高僧の「里帰り」とは、正しくお淨土に往生する喜びであつたと理解できます。お念仏を唱える中でこのよくな心が育くまれるということをお示しくださつたのです。安らかで豊かな心が育つよう、どうぞ毎日手を合わせてお念仏をお称え下さい。



それから何年か経ちました。その頃この滝つぼに大きな鯉が二匹泳いでいるのを見かけるようになりました。村の人たちは「この鯉は兄弟の化身」と信じ、この滝つぼを「次五郎の滝」と呼ぶようになりました。

おしまい

(総本山知恩院布教師会ホームページより)

る蓮のよう、私たち人間もどの
ような環境でも、周りの人たちが
どんなに悪い人たちばかりでも、
自分は常に清らかに堂々と生きて
いくことが大事だと教えています。

また周りの環境がどんなに清ら
かであっても、自分自身の中に煩
惱といふこころの汚れを持つてい
ることに気づき、不浄な欲望や誘
惑に負けず、蓮のように真っ白な
花を咲かせるように生きなさいと
も教えています。

七月・八月のお盆法要

本年のお盆法要是次のとおりです。

毎年お参り頂いている月のお盆法要にそれぞれご来山下さい。

○七月お盆法要

七月十六日（日）午後二時より

○八月お盆法要

八月十三日（日）午後三時より

八月のお盆は毎年お棚経参りにお伺いしております。

本年の地区は地元大下・仲町にお伺いします。

なお新盆でお棚経をご希望の方は早めに寺までご連絡下さい。

「浄土寺新本堂に旧瑞正寺の御本尊が納まりました」

東日本大震災の被害に遭われた仙台市淨土寺の中澤秀宣住職は、本年三月に津波で流されてしまつた本堂・庫裡を移転先の土地に新たに建立いたしました。

既に寺報二十一号でお知らせしましたとおり、その新本堂には旧瑞正寺の御本尊他四体のお像が納められました。お像是淨土宗の御本尊である阿弥陀如

來、觀音菩薩、勢至菩薩、法然上人、善導大師の計五体です。



「新しく生まれ変わった御本尊とお像のお姿です」

三月三十日、家内と共に新しく生まれ変わった淨土寺を訪れました。

中澤住職と奥様そして総代さんを迎えていただき、淨土寺歴代住職と大震災で犠牲になられた方々への回向をいたしました。

当山より御本尊が縁あつて宮城の地に遷り、こうして新しい本堂に納まつてあるお姿を見ると胸が熱くなる思いでした。

八月の大黒さん（住職の奥さん）のこと（このように呼びます）が袋中園創立四十周年記念式典におきまして、園に対する長年の功労に対し感謝状が授与されました。

この度、当山の大黒さん（住職の奥さん）のこと（このように呼びます）が袋中園創立四十周年記念式典におきまして、園に対する長年の功労に対し感謝状が授与されました。

家内は寺庭婦人会（淨土宗の寺に関わる婦人の会）の研修で十数年前に袋中園を訪れたことがあります。以来、これを縁に毎年暮れに実家が衣料の製造業であることから、衣類にお菓子料を添えて園に送り続けてきました。

何事も継続することが大切なことであり、今後とも微力ながら園に対する支援を続けていくことでしょう。



「淨土寺住職ご夫妻（左側）と総代さん（右端）」

沖縄袋中園より感謝状の授与

沖縄県糸満市にある社会福祉法人袋中園は、昭和五十二年に淨土宗が母体となつて設立された福祉施設で、園内には乳児院、障害児入所施設、児童養護施設などがあります。

この度、当山の大黒さん（住職の奥さん）のこと（このように呼びます）が袋中園創立四十周年記念式典におきまして、園に対する長年の功労に対し感謝状が授与されました。



（貞林院瑞正寺）